町民参加の町史づくり

竹富町史だより

1997.3.31(月)
第11号

竹富町史編集室
沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目次

第十二回町史編集委員会を開催……(1)
《町史編集委員会トピック》
黒島の史跡巡見……(2)
沖縄県地域史協議会の研修会……(2)
《歴史の証言》
小浜尋常小学校移転と井戸掘り……(3)
《新聞掲載論稿》
島之童名学序説……(10)
鳩間島記事……(12)
《写真に見るわが町》
網取小学校の廃校……(15)
《新聞で知る町の今昔》
大政翼賛会竹富村支部……(16)
《聖地めぐり》
東　御嶽……(17)
《文化財探訪》
カイジ浜貝塚……(18)
収蔵図書紹介……(19)
業務日誌……(22)
編集後記……(26)

●表紙の写真●

西表島東部にある古見小学校は、1895（明治28）年に大川尋常小学校古見分校として創立した。1924（大正13）年には小浜尋常小学校古見仮教場と改称された。戦後は大原国民学校古見仮教場となり、さらに大原初等学校古見分教場と改められた。1949（昭和24）年になると、中学校が開校し、小中校併置となった。写真は、1953（同28）年に撮影したもの。当時の児童数は35人である。

☆題字　大　城　正　明

第十二回町史編集委員会を開催

委員十六人に委嘱状を交付

竹富町史編集委員会の任期満了に伴う委嘱状交付式と第十二回編集委員会が二月一日、町史編集室で開かれました。委嘱状は西島本町長から十六人の委員に手渡されました。

委嘱状交付の後、西島本町長は「先人たちの残した歴史、文化には大きなものがあります。先人の残したものを、後世に継承することが私たちに与えられた責務だと思います。今後ともご指導よろしくお願いします」とあいさつ、協力を求めました。

第十二回編集委員会では、竹富町史第十巻資料編「近代・前近代」編の発刊について審議が行われました。「近代・前近代」編は、近代を廃藩置県（一八七九年）から終戦（一九四五年）までに時代設定して、その間の各種資料を編集すること。前近代は、島津氏の琉球侵攻（一六〇九年）から廃藩置県（一八七九年）までの近世期と、それ以前の古琉球期に発刊された同時代資料を扱うことが、確認され、論議を重ねました。

編集資料には近代の場合、古文書として既刊の『上杉県令巡回日誌』のほか、各種の村番所資料などがあります。前近代では『八重山島年来記』『八重山島規模帳』などがあります。議論の中で「資料の翻刻を進めながら、近代編を優先して編集作業を進めた方がいい」「近代編と前近代編を分冊したらどうか」との意見が出ました。分冊については「双方の分量を見ながら判断する」との考えに落ち着きました。

町史編集委員は十六人で、十五人が再任、一人が新任、任期は平成十一年一月三十一日まで。委員長は本成善康氏、副委員長には西里喜行氏が互選されました。

竹富町史編集委員会委員

◎印は委員長
○印は副委員長
※印は新任

◎本成　善康（元八重山教育事務所長）
○西里　喜行（琉球大学教授）
當山　哲男（元竹富町企画課長）
加治工真市（県立芸術大学教授）
※小濱光次郎（前泊高校校長）
西島　信昇（琉球大学名誉教授）
黒島　精耕（石垣中学校校長）
三木　　健（琉球新報編集局長）
玉城　功一（八重山商工高校教諭）
石垣　久雄（泊高校校長）
新本　光孝（琉球大学教授）
山盛　　直（琉球大学教授）
阿佐伊孫良（銀座郵便局職員）
上江洲儀正（南山舎代表）
登野原　武（竹富町教育長）
安里　碩八（竹富町史編集室長）

《町史編集委員会トピック》

黒島史跡巡見

竹富町の島じまの名所旧跡を訪ねる町史編集委員会（本成善康委員長）の第二回史跡巡見が二月一日、黒島で行われました。第十二回町史編集委員会に引き続き午後から実施されたもので、充実した史跡巡見となりました。

御嶽などを訪ねた史跡巡見

この日は曇天だったが、降雨のないまずまずの天気だった。編集委員は午後十二時の高速船に乗り込み、黒島の保里港に着いた後、黒島マリンビレッジで昼食をとった。そして一時、休息をした後、海中公園センターを見学し、ワンボックス車二台に分乗して、巡見の〝小旅〟に出かけました。

巡見場所は、古墓のイサンチャー、伊古桟橋、北神山御嶽、八重山舞踊勤皇流ゆかりの地、比江地御嶽、灯台、仲本海岸、アサイ村番所、プズマリ、船浦御嶽の十ヵ所。講師は當山哲男編集委員が務め、旧跡の由来などを分かりやすく説明しました。

巡見の最後には黒島ビジターセンターで本成委員長が多良間毛牛にまつわる説話を、掛軸を用いて古文書に基づいて話されました。町史編集室では、使用した資料を、今後の編集史料として活用するとして、コピーすることにしました。

沖縄県地域史協議会の開催

沖縄県地域史協議会（仲原弘哲代表）の一九九六年度第二回研修会が、昨年十月二日から四日までの三日間、上野村で開催されました。参加者は四十七人。上野村の歴史、文化にふれるとともに、近代の宮古島に関する史料について知識を深めました。

研修会の初日は、那覇市歴史資料室の外間政明さんが「那覇市歴史資料室所蔵宮古関係資料～尚家・横山家の中の宮古関係資料～」、プロヴィデンス号を語る会会長の仲間章郎さんが「プロヴィデンス号と宮古島」と題し講話をしました。

二日目はドイツ村を見学した後、平良勝保さん（城辺町史編さん委員）が「ロベルトソン号漂着事件の世界史的背景」をテーマに記念講演を行いました。午後からは上野村文化財調査審議会会長を講師に史跡巡見があり、来間遠見台、池田矼、久松五勇士顕彰碑、ドイツ皇帝博愛記念碑などを見学しました。

《歴史の証言》

小浜尋常小学校移転と井戸掘り

前本　良吉（九〇歳）
竹富町字小浜二五八四番地

〔はじめに〕

小浜小学校は、一八九五（明治二八）年六月一日に大川尋常小学校小浜分教場として創立したが、当初、小浜村番所附属織物工場の校舎を使用して、子供たちを教育していた。明治三〇年六月一日には小浜村番所西隣に学校敷地を定め校舎を新築、明治三十九年六月十二日には小浜尋常小学校として独立した。大正八年になると村番所跡に学校敷地を選定し、校舎を落成させ移転した。

学校はその後、同地で教育が施されていたが、一九三三（昭和八）年に大型台風が八重山を襲い、校舎が全壊するなど、未曽有の災害に見舞われた。そして再三、敷地の移転問題が持ち上がった。昭和九年九月十日には、現在の敷地に移転したが、決定までには紆余曲折があり、議論が噴出した。校地選定は、村内を二分して揉め、一筋縄ではまとまらなかった。

集落の西方に学校を移転させよう、と主張する南部落の人々。村番所の東側の現在の敷地に移転した方がいい、と唱える北部落の人々の意見が対立した。最終的には採決に持ち込まれ、村番所の東側を学校敷地に、と訴える北部落の人々の意見に決定した。

学校移転の場所が決まると、水問題が持ち上がったが、昭和十年五月には浦底功さん、前本良吉さんの二人が井戸を掘り学校に寄贈、水問題は解決した。この功績により、二人は昭和四十二年十月十日に学校図書館竣工を記念して挙行された、学校創立七十二周年記念式で識名信升校長から感謝状を授与された。

学校移転に際して、学校用地を現敷地の村番所東側に移転することに力を注ぎ、それに付随して水問題を解消するため、浦本功さんとともに、井戸掘りに尽力した前本さんから当時の様子を聞き取りした。

◆学校移転問題、持ち上がる

小浜校は、現在の敷地に決まる前には村番所（オーセ）に校舎があり、現在の与世山さんの屋敷が運動場だった。そこの一角に小さな仮校舎があった。この校舎は、現在の敷地に移るまで使用した。

学校では四年生、五年生、六年生は村番所跡にあった校舎で勉強し、残りの一年生、二年生、三年生は仮校舎に入って授業した。校長の住宅は、現在の大久さんの所にあり、佐久真長助校長から宮良長儀校長まで使っていた。

八重山は昭和八年に大型台風に見舞われ、大きな被害を受けたが、小浜校の校舎も破壊された。このような状況の中で、校舎を移転させよう、という話が持ち上がってきた。そして現在の場所に移って

きた。当時は、宮良長儀校長の時代で、どうしても学校は部落の西方に持っていかなくてはならない、という話が出てきたらしい。

学校移転の候補地は、部落から百メートルほど離れた西の方で、そこは平坦地になっていた。どうもそこに移すという計画であったらしい。学校を部落の西方に移転させようという運動を南部落の人たちがしたものだから、ビックリした。つまり、村番所跡地の場所から部落の西方に学校を持っていこう、という話だった。

◆北、南両部落の動き

南部落の人たちの言い分は、学校の側にいると北部落の人たちは、よく勉強する。そうなると南部落の人たちは負けてしまう。そこで学校は部落の西の方に持っていった方がいい、ということだったらしい。部落の人たちは、学校移転を決めるために、村番所の庭に集まって協議することになり、いろいろと話し合うことになっていたとのこと。

学校敷地の移転に向けては、南部落の評議員である棚原長浩さんの親父の平西朝育さんの親父と二人が中心になり、南部落をひとつにまとめて、学校を部落の西の方に持っていこうと話し合っていた。そして協議のため、後日、村番所に集まることになっていた。それは事前に集まる日を決めてあった。

協議の当日になると、南部落の人たちは早めに、村番所に集まっていた。しかし、来てみると北部落の人はいない。南部落の人たちの話を聞くと、学校は部落の西の方に移さなければならないということで話が進んでいた。

学校移転については、大きな課題として水の問題があった。部落の西方には昔から田んぼがあり、井戸がふたつあった。協議の中で「水の心配はない」というような話をしていた。私は、これを聞いて「これは大変だ。即決になると一大事だ」と思い、すぐに部落内を駆け回って、一組、二組などの人々に「早く来い。集まれ」と呼びかけた。

私が呼びかけたことで、部落の人たちは村番所に集まって来た。そして、南部落の人たちと一緒に協議をした。協議の中で、南部落の人たちは部落の西方に移転させるということで、意見統一をしていた。北部落の私たちは、村番所の東側に学校移転させる、という考え方を持っていた。

村番所の東側には、松原浩さんの父さんの田んぼが多かった。そこには段々状になっていて水田が広がっていた。学校移転計画をしている場所は、松原浩さんのお父さんの田んぼが少し残っていたので、それを購入して、ひとまとめにして交換し、村番所の東側に持ってこよう、として相談した。そうすると、松原さんは「大丈夫だ」と言った。

◆採決の結果、村番所東側に決定

学校移転について、北部落の人たちは村番所の東側に実現させる。南部落の人たちは、学校を村番所の東側に移すことはできないという。敷地選定をめぐって、

議論が沸き立ったが、最終的には多数決に持ち込まれた。そうすると僅差ではあったが、南部落の人たちは負けた。学校移転については相当に揉め合った。学校を村番所の東側に移転するとなると、問題は水の確保をどうするのか、ということだった。当時は、小使いが甕に水を入れて担いでいるような状態で、村番所にある井戸だけでは、どうすることもできなかった。学校を村番所の東側に造った場合には、井戸がなければならなかった。

赤瓦屋根だった旧校舎の模型

水問題が持ち上がる中で、浦底功さんと私は、「水なんかは問題ではない。私たちが井戸を掘って確保する」と断言した。二人がこのように言ったものだからこれからが大変だった。学校の敷地は村番所の東側に移転することが決まった。

◆学校移転作業が始まる

学校が移転する前の現学校敷地の土地状況は、村番所の西側は半分は石山になっていた。そのため井戸を掘るには石山を切り崩して、地均しをしなければならなかった。その作業には二ヵ月ほどかかった。

ところが、南部落の人たちは反対したこともあり、学校の移転作業にはあまり積極的ではなかった。当時、私は部落の労働の係をやっていた。そのため、部落の人たちを作業に動員させることもしていた。仕事は奉仕作業のようなものだった。地均し作業は、学校を造るためにまず始めなければならない仕事であった。

地均し作業と併せて校舎を建てることになった。校舎は赤瓦屋根の長屋風の建物で、古見という建築家が請け負い仕事を進めた。建築現場には、上間という若い大工も働いていた。彼は戦争中、石垣島のナーヤマでマラリアにかかって死んだが、腕のいい大工職人だった。

校舎の建築とともに、運動場も整備する必要があった。学校移転作業を進めていると、学校で使う水をどのようにして確保するのか、ということが大きな問題として持ち上がってきた。

◆井戸掘りに着手

学校では、ちょうどあの時、棚原さんが学校後援会（現在のＰＴＡ）の係をしていた。彼は私のところに来て、「おまえたち二人は、井戸なんか問題ではない。強く言ったのではないか。今にでもすぐ井戸を掘れ」と命令した。

私たち二人は「水など問題ではない」

と言った手前上、仕方がないので、井戸を掘ろうと決めた。あの時、学校には山城浩先生がいた。当時、道の側にコンクリートのような硬い石があったが、棚原さんが言うには「ここに掘れ」ということだった。岩盤になっている場所に井戸を掘れということだった。

井戸を掘る場所は、道から二㍍しか離れていなかった。私は「掘ってもいいよ」と言ったが、「井戸を掘るには相当苦労するだろうな」と思っていた。

私は、ちょうどあの頃、護岸を造るための三角石をマコシヤマで掘っていた。そのため井戸を掘る道具は全部そろっていた。そこで井戸掘りは大丈夫だと思った。井戸掘りはハッパなどは使わず、すべて手作業だった。仕事は石鑿のイヤハンマーを用いての根気の要る作業だった。

◆石鑿だけの掘削作業

道具は、ツルハシなどを一切に使わず、八寸の大きさの石鑿を八本使用して作業を続けていると、成底武雄さんの親父が「自分も応援するから」と言って鑿の先を鍛冶屋に持ち込んで焼いて来てくれた。私の仕事を見て、成底さんが温かい手を差しのべてくれたことに対しては感謝感激で「ありがとう」とお礼を述べた。

井戸掘り作業は、根気強く続けたが、苦労の連続だった。岩盤は、コンクリート以上に硬く感じられた。作業は何日ぐらい続いたのだろうか。おそらく二十日から一ヵ月ぐらいの期間だったと思う。作業をしている時、思い出した。私のおじさんは石大工だった。竹富島の花城という家で井戸を掘って水を出した経験があったので、「掘っていると、こっちは大丈夫だ。やれる」と思った。

井戸を少しずつ掘っていると、ようやく段々と深くなってきた。二尋ぐらい掘ったところで、今度は上下に降りたり登ったりすることになった。そうしていると、登り降りするのに梯子をかけると面倒くさいので、井戸の内部の壁の両脇に足場を設けて降りたり登ったりしていた。

ところが、三尋ぐらい進むと、掘り続ける地底の音が違ってきた。「これは珍しい」と思った。その時、浦底さんは自分の都合で牛を連れに行ったので、代りに仲宗根という、ヤンバル出身の石大工を頼んできて、その人と一緒に仕事をした。

◆水脈に突き当たり、水が出る

二人で井戸を掘り続けている時、掘る音が違ったので、作業しているうちに「何かあるのではないか」と感じとった。そこでハッパ鑿を持って来て、地底の鑿打つ音が違っていることを念頭に置いて掘り続けた。深さ一尺ほど掘り続けると岩盤の音が違うので、どんどん掘り進んだ。そうすると、岩盤がどぼっと落ち込んだ。

岩盤が落ち込んだ時、石鑿を見てみると、濡れていた。「ここには水がある。もう大丈夫だ」と勇気百倍になった。それから元気を出して、体を振るい立たせて掘り続けた。掘っていると、下部には地下水が流れており、誤って落ちると危険だから注意しなければならなかった。

地下水に竿を下ろして見ると、七尺ほどの水位があった。さらに掘り進んだが、注意していても危険を感じ、いざとなったら上がるようにということで、縄梯子を垂らしてつかまるようにしてあった。掘る作業は続いたが、下部には水が流れているので、道具を水中にでも落としたら一大事、今度は盤のすべてに吊り糸を付けた。いざという時には投げることになっていた。

井戸の内部、底には水をたたえる

作業をやっている時、掘り続けると地下水が見えてきた。そしてしまいには岩盤がどぼっと落ち込んだ。そうすると、水に突き当たった。私たちはビックリしたが、先生方はみんな喜んだ。

◆干ばつの時、井戸水で大助かり

私たちが井戸を掘ったのは昭和十年だが、その後、宮良長正校長が赴任して来られた、昭和十四年の一月から三月までは八重山は干ばつに見舞われた。当時、学校の運動場の東方には田んぼが残っていた。

長正校長は、島で採れる真竹を繰り抜いてパイプ状にし、その田んぼに井戸水を引き込むことを考え、そして、生徒に井戸水を汲ませて、水を田んぼに流し込んだ。井戸水は学校用水だけではなく、農業用水にも使ったので、だいぶ減った。そこは大きな地下壕になっていた。

井戸水が減ったので、今度は底にぽこっと落ちた石を割ってやった。そうすると、さらに水が沸き出してきた。地下水は底に大量にあるので、今度はポンプを用いて水揚げをやった。そうすると、竹富一雄さんが六年生の頃だと思うが、彼は井戸の中に降りて底を歩き回った。彼は井戸水が干ばつで大幅に減ったので、電灯を持って井戸の中を歩き、水を汚した。

学校はそこで長正校長が「そのままでは危ないから、井戸に降りることができないように石を積みなさい」ということになった。当時は、吉野高行さんの親父が学校後援会会長だったと思う。井戸の近くには行かないように、ということで石を隠して積んだ。

そして、その後、石積みが崩れて井戸の中に落ち込んだので、長正校長は「石を取り除いてくれ」と言った。そこで仕方がないので、井戸にポンプを持ち込んで、十時間ほど井戸水を汲み出した。しかし、何時間かかって汲み出しても水は地下から沸き出てくるほど、いっぱいあった。私は、「これはできない」と作業を中断して、水汲みをやめた。そのため石

は今でもそのままになっている。

私たちが掘った井戸だが、直径は人間のひと股ぐらいであまり大きくない。約一メートルぐらいだろうか。井戸の構造だが、掘った時には底は二段になっていた。段状になっていて、上部を汲み出すと、また下部の方にも大きな地下水が流れていた。

井戸の寄贈を記念して建てられたコンクリート碑

地下水の流れる壕は、高さ二㍍以上あり、広さは西の小浜久吉さんの屋敷の下方まで続いている。地下壕は小浜さん宅にあるフクギの根っこよりも、もっと西方に広がり、東方に向けては校舎の下まで延び、そこは平坦になっている。

◆井戸掘り、その後…

井戸の周囲の岩盤は硬かった。内部は窪んでいて水位は少し高かった。井戸水は、今は使っていないので水位は掘った時より、少し高くなっているかも知れない。井戸の深さは十五尺（約四・五㍍）から二十尺（約六㍍）ほどで、それぐらい掘ったのではないだろうか。

井戸を掘る前のことだが、そこに地下水があるということは、まったく分からず、そこまで考え方がいき届かなかった。地下を掘ると、水が出てきた。そういう感じだった。掘って水が出てきたので幸いだったが、もし水が出なければ大変だったに違いない。

学校の側にあった村番所跡にも井戸があるが、学校に掘った井戸の水位と村番所にある井戸の水位とどちらが高いのか、ということを長正校長が調査したことがあった。調べてみると、学校の井戸の水位の方が高く、村番所の井戸は少し低かった。

現在の井戸水の推移は、学校の元の高さまできている。

◆地下水の不思議

二つの井戸の調査から明らかになったことは、村番所の井戸と学校の井戸とは水脈は別になっていること。考えると地下水というものは本当に珍しいもの。大盛さんの井戸と、ウトヌカーと言って道路の南側にある井戸は、水位が低く杓で水を汲むことができる。今では、その井戸は埋めてしまった。水位は、手杓で汲み上げることのできるほど、近い所にあった。

ところが大盛さんの近くにある、道路の南側の大石さんの所の井戸は七尋掘ったが、水は出てこなかった。これは本当

に珍しい。このように考えると、小浜島の地下水はどのように流れているのだろうか。地下水というのは不思議なものだ。

学校は多数決で村番所の東側に移転することに決まったが、運動場も広くなり良くなった。移転した後に南部落の人たちから、別にあれこれ文句の言われることはなかった。学校移転となり、井戸が掘られたこともあり、それ以後は学校の敷地問題が出ることはなかった。

感謝状

前本良吉殿

貴殿は本校が昭和九年現敷地に移転する及んで児童生徒の飲料水に対する不便いなる問題に対し浦底氏を協力し井戸を掘りて寄贈されました

爾来本校の飲料水問題は一挙に解決されて今日に至っております

本日学校図書館建設を記念して創立七十二周年の記念式を挙行するに当り三十年前を回顧して偉大なる功績をたたえて感謝の意を表します

昭和五十七年十二月十日

小浜小学校長 [illegible]

創立72周年を記念して贈呈された感謝状

学校では、創立七十二周年の記念式に、識名信升校長が私に感謝状を贈ってくれた。学校は現在地に移転してよかった。今では八重山郡を見通せる風光明媚な場所となり、移転して本当によかったと思う。小浜校のような素晴らしい運動場はどこの学校にもない。それだけは胸を張って言える。現在の運動場は、仲盛治校長の時代に拡張され、公認グラウンドになっている。

（採録・通事孝作）

《新聞掲載論稿》

島之童名学序論

―竹富村字黒島の調―

宮良賢貞

人間に関する総ての名の中で、最も早くから発達をしたものは、即ち童名―ヤラビイナー（わらべなの義）との話である。原始人の時代―石器時代では今日ある所の仇名に等しい名が童名として用ひられて居った。

（例）

一、顔色の黒き人　くろ

二、口の尖れる人　狸

三、動作の不活発な人　海鼠

四、鐵面皮　ラッキョウ

その他、日常手に取って使用してゐる所の家畜等の名称を借りて名としたものがたくさんある。

（例）

鍋、釜、竈、樽、牛、馬

亦に秀でたものをあやかりて名としたものもある。

（例）

松、竹、梅、鶴、亀

◇童名の付け方

童名は赤子出産の後四日か或は、十日目のナーツキヨイ（名付祝）の日に命名されるものである。

殊に此の式場には婦人だけが列席して男子は同夜招かれて酒宴に列し初めて命名の報告を受けたものである。

今その風習について一言申す。産児が長男である時は直系祖父の名をつける。長女の時は直系祖母の名をつける。又次男の時は傍系祖父の名をつける。次女の時は傍系祖母の名をつける。又三男及び三女の時は、長男及び長女の時と同じく直系祖父母の名をつけ、四男及び四女の時は次男及び次女の時と同じ傍系祖父母の名をつけ、以下皆直系祖父母母傍系祖父母の名をつける。

又稀には特例がある。例えば近親の賢英偉丈夫の名にあやかーりて命名することや幼児が病弱であって多病の時には相性で無縁の人に求めて其の人の名を乞い命名することもある。

◇生とは

生とは全人類を木、火、土、金、水の五種即ち五行に分けて火は水から生じ、土は火から生じ、金は土から生じ、水は金から生じ、木は水から生ずるもので皆相和するものであるとのこと。即ち相性である。

又此れと反対の生がある。此の反対の生は人々の忌み恐れるもので、木は土に勝ち、水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝つとのことである。

婚姻に絡まって大問題を巻き起こすのも此の生である。

◇祖先の名を与える意

生れた所の子供に祖先の名を与える所の風習は、確かに祖父母が孫に生れ代るといふ所の信念から発達したものであると云ふ。八重山の人々は最も血統を重んじてゐる。

其の先祖に善人あれば、其の子孫に必

ず善人が生まれ、悪人があれば悪人が生れると堅く信じてゐる。（若き人々にもしかり。離島に行くに此の信念一層深し）

赤子出産の時四日か十日の命名式に直系並びに傍系の祖父母の名のみつけ、曾祖父母以上の人々の名をつけぬのは祖父母をもって、家庭の最上位の人格者として尊敬し曾祖父母以上をウヤピイト（祖人或は親と書く）として神格者として信じ、崇拝してゐる風習のため曾孫祖父母以上の名を用ふのを余り恐れ多いと信じてゐるからである。

童名を島の或る家について調べてみるに、一種が普通で二種あるのは小数である。

一種の時は、其の家は代々同一の童名をもって継承するのである。

二種ある時は、隔代に継承するものである。

只次男、四男のやうな偶数番の人と女子の場合にだけ新しい名がつくのである。

（例）

甲家の祖父母と乙家の祖父母の名が同一のために、一家で同一の童名が何人にもつけることがある。

◆◆は祖父と長孫とが、んぎしー父と次男と四男がみーがの様に又◆◆◆家は祖父も父も長男も次男も皆かなーの所がある。

所が日常の呼び方には何等差し支ふる事がないのである。

例へば◆◆家に就て調べると祖父は一家中の年長者だから童名の必要はなく、うぶざ或いはいざで通る。長孫はこーに（孝子）、末永く孝行を尽くすの義通りで三孫に到りて初めて、んぎしーが呼ばれるのである。父と次男と四男がみーが、即ちめーくの時は父は祖父よりこーにで呼ばれ、次男はめーくで呼ばれ、四男はみーがで呼ばれる。

又◆◆◆家について調べると、祖父と父の童名は必要なく、父はこーにで呼ばれ、長男はかなー、次男はかに、三男はかなーま、四男はかーなーで呼ばれて混雑することがなく、用を便じることが出来るようになってゐるのも面白い。

◇かなさーに付いて

かなーま、かなー、んぎせーま、んぎげーのなはかな、んぎしのなを変じての呼び方である。即ちかなさなーである。かなさと云うふことは、我が国の古のかなし（可憐）、いとほしと云ふことである。

島の童名は其の種類が少なく、殆ど数ふるほどの数であるけれども、その平生の呼び方に於いては少しも相混雑することはないのである。

現今島に用ひられてゐる所の男女の童名、やらびなーを項を改めて書くことゝする。

（つづく）

（八重山民報、昭和九年二月一日掲載）

※原稿では「つづく」とあるが、その後、掲載された形跡はなく、一回きりの論稿のようである。

鳩間島記事

宮良當壯

鳩間島は周囲三十二町、面積が〇・七五方里、八重山郡島中最小の一島である。西表島の北に当って僅かばかりの海を隔て、山も川も田も無い平島、土語に所謂ヌングンシマである。石垣の主邑からは海上七里、石油発動機船で順風三時間を要する。南には目近く西表島の深緑の山と相対し、海を渡って其島の土地を耕作してゐるのだが、行政上には其東の竹富島と合して一村を為し、現在は沖縄県八重山郡竹富村字鳩間と呼ばれて居る。

戸数は最近に六十八戸、大正三年に比べて八戸を増加した。人口は三百九十五人である。郵便局も警察も無く、月六円位を給せらる区長が一人、無給の総代が二人と役者が三人、此六人が家業の片手間に島の事務を執って居る。島には旅館が無いので時折やって来る者は区長の家に止まることになって居る。昨年八月に自分が此島を尋ねた時には、区長の家には西表から巡査が来て滞在して居たので、総代の大工といふ人の家に世話になった。

六十八戸家の三分の一ちかく、今は瓦ふきになって居る。他の島々と同じく何れも二棟に分かれ、おも屋をウブヤー（大屋）と謂ひ、炊事屋をトーラと謂ひて居る。家は必ず南向きで、トーラは大屋の西に在り、一般に土間（ナカザ）になって居る。そこに火の神中心の竈がある。竈には一々水の字を書く風習がある。トーラの後方には便所を兼ねた豚小屋があり、山羊や牛の小舎も其近くに設けられている。馬は此島には居ない。

門は主屋の二番座に面して開いて居る。二番座の奥は仏壇になって居る。門外から見通さぬように入って突当りを石垣にしてあり、之をマイグスク（前石垣）を取り巡らし、これに通例の胡椒の蔓を匍はせてあるので、五尺幅の狭い路を通ると一種の香気を放って佳い。

此植物は石垣の崩れを防ぐ他に、葉を採って天麩羅に揚げ、実を粉にして素麺吸物などの薬味にする。石垣島なども以前は此通りであった。青葉の間から真紅の実がちらちらとするのは雅なものであった。家の後方には芭蕉、甘藷、南瓜、各瓜などが作ってある。家の前から東の庭には、ピャクシン、浜木綿葡などの草木が少しづゝ栽ゑてあったが、ちやうど自分の行った頃は、久しい旱魃続きでそれが皆枯れかゝってゐた。

斯様に旱が久しく続く際には軒下に茲へて置く多くの水甕も皆からである。村中には井戸は少しあるが、塩辛くして飲料にはならぬ。たゞ村はずれの友利御嶽の東ピローサ（食はず芋）やマラバソー（低芭蕉）などの茂った処には宮古島で見るやうなウリカー（下り井）即ち岩窟の低深く下りて往って、真っ暗な窪みから手探りて水を汲む穴井があり、之をアーンヌカー（東の井）と謂ってゐるが、これも水量が僅かな為に、いつも穴の外で甕や手桶を頭に載せた娘たちが水の沸くのを待って居る有様である。

これも尚水の得られぬ場合には舟で南の西表島に渡って山の水を汲んで来ることがある。それを石油缶に一杯十銭ぐら

ぬで売って居る。そうなると家の水甕は内に移し隠されてしまふ。外から来て居る者の一番の苦痛は油汗の出る暑さに湯に入ることの出来ぬことであるが、島の人たちは海を「官の湯風呂」などと戯れに名付けて女などは着物のまゝで入り体を洗ふのである。

大正12年に起きた干ばつでの雨乞い祈願

いよいよ旱魃が続くと、御嶽で雨乞いの願い事がある。ツカサ（巫女）を中心として婦人ばかりが此の祭には参与し、祈願の詞は諄々として生ける人に対するやうである。島民の崇敬して居るのは友利御嶽（トウムリウガン）で、これが鳩間島唯一の神社である。歌で名高い仲丘（ナカムリ）から東に当って昼尚暗きマーニ（黒ヤシ）の逐道クジ、ジャカラなどの蔓草の繁った間を進んで行くと、急に明るくなってそこにフキンヌフキ（大谷わたり）などの生えた石垣を繞した神域がある。

入口には瓦ふきの小さな六脚門があって、それら内へは固より女でも巫女以外の者は入ってはならぬことになって居る。それ故に玉垣の内の事は一切知られて居らず、たゞ九月の祭礼の時に、巫女が奥深く進み寄って神に直接奉仕することがあるといふのみで、常の祈願の場合は巫女も亦この入口の前に跪くのである。

入口の右側には斜めに生えた蒲葵の老樹がある。根から約二丈位の処で真直ぐになり、それが丁度此入口の上に当って居る。祭の時神の降りたまふ樹だと謂はれて居る。其前が草木を切開いて設けられた斎場であり、爰に六坪ばかりの瓦ふきの一棟がある。即ち一般人の礼拝所で正面を神棚とし、香爐と立花が置いてある。香爐の後の壁は格子形の小窓になって居り、これが神御通路だと謂って居る。奥の入口の正面に当るのである。

又香爐の棚に並んで今一つ子供を抱いた女の木彫り像を安置した棚がある。像は彩色がもう半ば剝げて居るが、今から六、七十年も前に沖縄から石垣島に寄留して指物業をして居た初代大見謝の作といふことであった。「沖縄の人形芝居」の中に記述して置いたウリウンミーヌモーシーといふ人形を彷彿せしむるのであった。

友利御嶽の様式の他と異なる点は、参詣路が礼拝所の前面からでなく、其両側から之に近づくことである。社が北向きであるのに村落が南方に在るためかと思ふ。毎年陰暦六月十三日には穂利、プーリ、祭が行はれる。この祭は豊年を祝するためであるが、同時に各自の健康を祈る為に巫女に一定の米穀を呈することになって居る。

これが即ち巫女の一年の俸給になるので、其制は男子七歳以上五十歳以下一人に付き一合五勺づゝ、七歳以上の女と五十歳以上の男とは其半量、七歳未満は数に加へられぬ。大正十五年の納米は人数三百人、米四戸五斤であった。

御嶽内にある女性の木彫り像

自分は友利御嶽を辞して東の方へ下りやうとして居ると、不意にマーニの葉から青鳩がけたゝましく飛び去った。同行の学生がコーマ、コーマ（卵、卵）と悦びの声をあげてマーニの長い葉を引き寄せて生み立ての鳩の卵を取り上げた。此島には鳩（パートゥ）が至って多い。シドウトウドゴッコと鳴く青鳩のことをパトゥ・グッザ（鳩の叔父さん）と謂ひ、ベーベーベーッカローと牛の如く鳴く雉鳩をベーカベーと謂って居る。村の中に居た時も仲丘に登った時も絶えず此声を聞いた。島の名の鳩間も或は此鳥の多い事を意味するのではないかと思ふ。

鳩間は沖縄県全体を通じて優雅なる「鳩間節」の文句によって最もよく連想せられて居る。島でも此歌を歌って居るが、曲も詞草も少しばかり他の島に行はれるものと異なって居る。その仲丘は島の中央に在る島随一の高地である。話をしながらも登られるほどのごく緩やかな傾斜で膝に手を突くところは僅かに二階の高さ位しかないが、頂上に立てば四方の海が見え、西表島、石垣諸島の遠近の眺めは風情が多い。

東に三本、西に二本あったといふ大木の蒲葵は二十年前の土地整理の際に伐られてしまひ近年栽えた若木はまだ幹も立たず

美しや萌いだる丘に蒲葵
清らさ列りだる頂ぬ蒲葵

は全く歌の詞ばかりとなってしまった。現在は目につく樹も無くたゞ茅草の繁った中に土石を積み上げ、そこに一本の柱を立てゝ航海者の目標にランプを掲げる設備がしてあるだけである。

（『八重山新報』昭和二年一月二一日、二月一日掲載）

※宮良當壯は、大正十二年旧暦八月七日に鳩間島を訪問している。この年には島は、干ばつに見舞われ水不足に悩んだようである。紀行文には干ばつのあったことを記しているが、同時に雨乞いの行事も写真に収めている。

廃校式で学校の標札を手にする最後の仲嶺栄高校長

《写真に見るわが町》

網取小学校の廃校

西表島西部の網取小学校が歴史を閉じたのは、一九七一（昭和四六）年だった。時期は沖縄が本土復帰を果たす前年で廃校式は、同年三月二十二日、修業式と卒業式に引き続き行われた。学校は過疎化の荒波に揉まれ、七十三年間続いた歴史に終止符を打った。同校は一八九八（明治三一）年四月に大川尋常小学校崎山分校として創立した。一九〇六（同三九）年六月二日には大川尋常小学校から分離し、西表尋常小学校崎山分教場と改称され再出発した。

廃校式には全校児童生徒（小学校六人、中学校五人）を取り囲むように瀬戸弘町長（当時）をはじめ、町議会議員、教育委員、町外に住む網取出身者もクリ舟で駆けつけた。その数は百人以上に膨れ上がったといわれる。

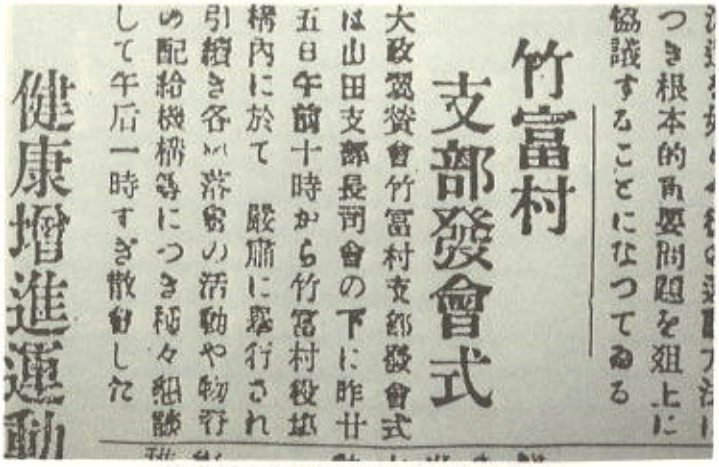
新聞記事によると、当時、校長の要職にあった仲嶺栄高氏は語っている。「生徒、教師、父兄が家庭的で協力を惜しまず、やりがいのある学校だった。へき地校振興を全く無視した政治に怒りを覚えます」と。廃校式で伊泊児童生徒会長は「わが母校・網取小中学校がなくなってしまった。突然なことなので、実感はまだ湧いてきませんが、さびしいです」とあいさつしている。

写真は、取り去ることになった木製の学校標札を手にする仲嶺校長。「螢の光」も悲しく、との新聞の見出しが胸を打つ。

《新聞で知る町の今昔》

大政翼賛会竹富村支部

日本は一九三一（昭和六）年の柳条溝事件を契機に満洲事変が勃発したのを受けて戦時体制が一段と強化されていった。


つき根本的重要問題を俎上に協議することになつてゐる

竹富村支部發會式

大政翼賛會竹富村支部發會式は山田支部長司會の下に昨廿五日午前十時から竹富村役場構内に於て　嚴肅に擧行され引續き各部落の活動や物資の配給機構等につき種々懇談して午后一時すぎ散會した

健康增進運動

竹富村支部発足を伝える新聞記事

翌年の一九三二年には、海軍が上海で中国軍と交戦した第一次上海事件、満洲国の建国、海軍将校らが首相官邸などを襲撃して犬養首相を射殺した五・一五事件の発生など、国内外は大きく揺れ動き、世情は軍国の臭いが色濃くなった。

国際連盟からの脱退、ワシントン軍縮条約の破棄、ロンドン軍縮会議からの脱退、二・二六事件の発生と続き、盧溝橋で日中両軍が衝突した日中戦争が始まり、『国家総動員法』が公布されると、日本は軍国主義国家に生まれ変わり、米欧諸国といずれは激突するであろう、戦争への道をひた走った。そのような社会状況の中で一九四〇（昭和一五）年十月十二日に「大政翼賛会」が発足した。

「大政翼賛会」は、新しく決まった政府の「基本国策要綱」に基づいて作られた組織で、それまであった様々な歴史をもつ各政党が一応すべて解散して発足した。それは官製の、いわば国民統合組織だった。『海南時報』の昭和十五年十月十四日付け紙面に「十二日首相官邸で大政翼賛会発会式！」との見出しで記事扱いがあり、「政壽萬歳を奉唱しここに厳粛裡に大政翼賛会は誕生し輝かしい巨歩を進めることとなった」と綴られている。

初代総裁には近衛文磨、事務総長には有馬頼寧が就任した。組織は組織局をはじめ政務、企画、議会、総務の五局があり、それが二十三部に分かれていた。地方にも組織力は及び、支部長は各都道府県知事が兼任した。当初の考え方は、強力な政治体制の確立が目標だったが、段々と内務省主導の色合いが強くなり、上意下達の機構、要するに政府に協力する結社に様替わりしていった。

沖縄県にも大政翼賛会沖縄支部が太平洋戦争が勃発した二日後の一九四一（昭和一六）年十二月十日に発足した。大政翼賛会竹富村支部は、沖縄支部に先立ち一九四一（同一六）年四月二十五日に村役場で発会式がありスタートを切った。村支部長は山田武三村長が務め、発会式では各部落での活動や、物資の配給機構について話し合われた。大政翼賛会組織は全国津々浦々まで深く浸透し、県、市町村はがっちりと組織に組み込まれた。

《聖地めぐり》

東御嶽

小浜島の村内にある嘉保根御嶽の「元御嶽」として重要な存在価値を持つ。御嶽は港から南西の方向にあり、遠くに鳥居が見える。御嶽へのルートは、港から県道・小浜港線を通り、小浜糖業㈱を右手に見ながら、集落への道筋とは反対方向に左折して進み海浜に出る。そこから砂浜を東方に歩き小川を越えてたどり着く。御嶽の一帯はアールヤマの聖地となっている。

島の南東のアールムティにある東御嶽

御嶽の由来については、『小浜島誌』（山城浩著）に詳しく記述されており、琉球王府時代の米の貢納にまつわる兄妹の物語りがある。兄が刈り取った納税用の稲を機織りに専念していた、妹がにわか雨が降ることにも気がつかづ、濡らしてしまった。妹は「これでは税金を納めることはできない」と責任を感じてどこかへと消えてしまった。

その後、数日間がたって、ずぶぬれになった妹の霊魂姿が御嶽のあるアールムティの海岸に現れた。島の住民は霊魂をただの人ではないと悟り、アールムティの森林一帯を聖地としようと王府に上訴し、それが認められて御嶽となった。

御嶽は航海安全を祈る、拝所にもなっていることから「龍宮の御嶽」としても親しまれている。時には海運業を営む関係者が祈願に訪れることもある。

沖縄全域の公儀御嶽を掲載した『琉球国由来記』巻二十一にも載っている。神名は「スタタラ神本」、イビ名は「根根春神本」とある。トゥニムトゥは宮里家で、神司も同家の出自から出ている。小浜小中学校の東側にある破風墓には初代神司を祀ってあるといわれる。

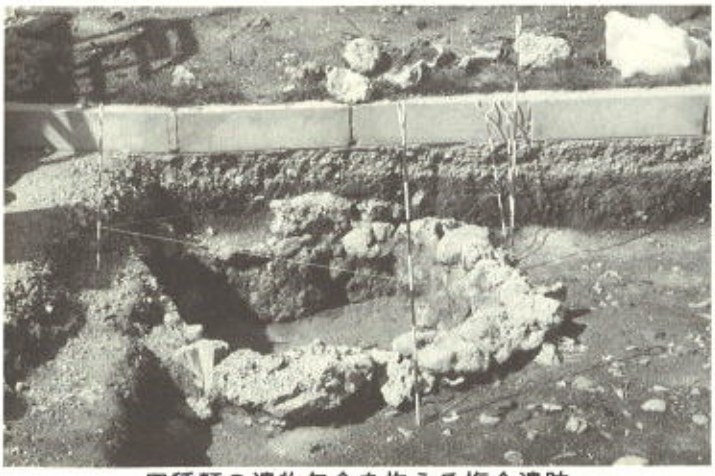
御嶽は入口に鳥居が建ち、そこをくぐり抜けると、階段があり、香炉が一基置かれている。さらに琉球石灰岩で出来たアーチ状の門を通り抜け、階段を数段登った場所にイビが広がる。そこには拝殿はなく、敷石の上に石体を背にして香炉が置かれている。構造からして御嶽の原初的な形態をとどめている。

御嶽は周囲にテリハボク、リュウキュウコクタン、ソテツ、アダン、クサトベラなどの亜熱帯常緑樹が生い茂り、神々しさを漂わせている。イビは小高い丘に形成されているが、下部は戦時中に使用された海軍特攻艇の格納壕が口を開く。戦時中、第二六震洋隊が駐留していた。

《文化財探訪》

カイジ浜貝塚

竹富島の東側に残る蔵元跡の周辺一帯に広がる遺跡である。島の一周線道路建設に伴い、一九九一年九月から二ヵ月間にわたり、県文化課が実施した緊急発掘調査で明らかになった。



四種類の遺物包含を抱える複合遺跡

竹富島は、島尻層を琉球石灰岩が覆い、最も高い場所で二十㍍。島ではこれまで小城盛遺跡、ンブフル遺跡、竹富貝塚など十二カ所の遺跡、貝塚が発見されている。その中でも十二世紀から十三世紀の石積み囲い集落跡（東新里）、十四世紀前半の集落跡（西新里）が確認された新里村遺跡は有名。この遺跡から八重山式土器の祖型となる「滑石製石鍋模造土器」が検出され、注目を集めた。

県文化課は緊急発掘調査に先立ち、コンドイ浜からカイジ浜に至る一帯で試掘調査を行ったが、その結果、周辺付近には無土器貝塚群が形成されていることが分かった。この試掘調査の結果を受けて緊急発掘調査は、蔵元跡から西方へ道路建設にかかる部分に限定して行った。

緊急発掘調査は短期間だったが、極めて貴重な調査結果を得ることができた。それは時代の異なる遺跡が重なり合って存在していること。つまり「複合遺跡」であることが判明した。遺物包含層は四層から成り立ち、一層（最上部）は明治期以降に形成、そして地下に向かって進むにつれて、十四世紀から十五世紀（二層）、十二世紀から十三世紀（三層）、十世紀以前（四層）となっている。

遺物包含層をさらに分析すると、第一層からは炉跡を検出、第二層からは村落が形成されていたことを彷彿させる青磁が出土、第三層からは東新里遺跡とは時代が重なるが、釜タイプの土器が発見された。第四層からは無土器期で料理する時に用いられるストーンボールが出土した。また墓と想定される石積み遺構も姿を現わしている。

貝塚内から無土器時代のシャコ貝やタカセ貝などの貝類も検出されている。遺物包含層は序列をなして貝塚一帯に広がっており、遺物の中には三角形をした長さ三㌢の鏃（やじり）も一個検出された。

八重山には多数の遺跡があるが、カイジ浜貝塚のように層序に連続性があり、無土器期から段階的に年代を重ねる遺跡は極めて珍しい。島では十世紀以前の遺跡は初めてで、最古の遺跡となる。

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
読谷村役場	平和の炎
和田光弘	〈写真集〉駒街道
宮城久幸	島を出た民の戦争体験集
石垣市市史編集室	石垣市史のひろば　15号
〃	〃　16号
具志川市史編さん室	具志川市史だより　2号
〃	〃　創刊号
沖縄県地域史協議会	あしびなぁ　2号
石垣市立八重山博物館	石垣市立八重山博物館所蔵目録「漆器」第1集
〃	〃　染織1　～第2集～
〃	〃　博物館あんない
〃	〃　八重山蔵元絵師画稿集
沖縄県議会事務局	沖縄県議会史　第十三巻
今帰仁村教育委員会	なきじん研究5　―今帰仁の歴史と文化―
石垣市教育委員会	石垣市の文化財
今帰仁村歴史文化センター	なきじん研究「すくみち」
天仁屋字誌づくり委員会	道　ジュネー
具志川市教育委員会	防衛庁資料目録
浦添市立図書館	浦添市立図書館紀要
今帰仁村教育委員会	仲村源正氏辞令書関係資料
小濱光次郎	鳩間島追想
沖縄県立博物館	「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」
中村幸裕	「ヌジャン」中村幸裕写真集
沖縄県八重山支庁	八重山要覧
沖縄県市町村職員互助会	互助会あんない
糸満市教育委員会	糸満市制施行20周年記念誌
今帰仁村教育委員会	あしびなぁ　第7号
名護市史編さん室	久志の歴史を歩く
竹富町経済課	竹富町の畜産
読谷村役場	平和の炎　VOL3
那覇市企画部文化振興課	琉球の書画展
沖縄県広報協会	沖縄　9
名護市編さん室	未来への誓い
金武町役場	金武町平和推進事業報告書
西原町役場	西原町世帯別被災者記録
那覇市文化局歴史資料室	写真でつづる那覇・戦後50年　一九四五～一九九五
北中城村史編纂委員会	北中城村史　第2巻　民俗編
㈱沖縄コカ・コーラボトリング	さわやか25年

ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館「館報」第7号
〃	〃　ひめゆり―感想文集―　第7号
南風原町文化センター	戦争遺跡（壕）の保存活用を考える
名護市史編さん室	戦後新聞記事目録　第3集
南風原町文化センター	尚泰と尚家の人々の暮らし
沖縄県立図書館史料編集室	史料編集室紀要　第21号
沖縄県立博物館	久米島総合調査報告書
読谷村史編集室	読谷山の由来記
〃	官報にみる読谷山
那覇市議会事務局	那覇市議会報告　復刻版　第1集
〃	〃　第2集
沖縄戦後選挙史編集委員会	「沖縄戦後選挙史」第1巻
〃	〃　第2巻
花城亨	たけとみ創立70周年記念誌
城辺町史編纂委員会	城辺町史　第2巻　戦争体験編
西原町史編集委員会	西原町史第5巻　資料編4　西原の考古
沖縄県立図書館資料編集室	沖縄県史料　考古関係資料1〈前近代9〉
嘉手納町史編纂審議会	嘉手納町史　資料編3　文献資料
沖縄県立図書館史料編集室	沖縄県史　資料編2　琉球列島の沖縄人他
	沖縄戦2（原文・和訳）
沖縄戦後選挙史編集委員会	沖縄戦後選挙史　第4巻・別巻選挙結果調
三日月町史編纂委員会	三日月町史　上巻
〃	〃　下巻

金武町史編集さん委員会	金武町史　第1巻　移民本資料・証言編
仲里村史編集委員会	仲里村史　第4巻　資料編3　仲里の民話
那覇市議会事務局議会史編さん室	那覇市議会史　第3巻　上資料編2　議会の活動
沖縄県議会事務局	沖縄県議会史　第14巻　資料編11
三木健	沖縄・西表炭坑史
赤座憲久	ガジュマルの木かげ学校
石島英文	童謡詩特集　へちまの花
瀬名波栄	太平洋戦争記録「石垣島方面陸海軍作戦」
沖縄県歴史教育者協議会	「歴史と実践」第16号
東京八重山郷友会	東京八重山郷友会創立70周年記念誌「八重山」
竹富島文化協会	若夏に歌い舞う　石島英文詩曲集
沖縄県総務部知事公室平和推進課	15年戦争の証言
十島村教育委員会	十島村誌　資料編1　年表及び追記
東京沖縄県人会	月刊　おきなわの声　縮刷版
糸満市	糸満市における沖縄戦の体験記録
糸満高等学校戦争遺品戦後の品々展示会実行委員会	戦争遺品展・戦後の品々展示会報告書
東京・八重山文化研究会	八重山文化　第7号
〃	〃　第8号
石垣市市史編集室	石垣市叢書1
星砂の島編集委員会	星砂の島〈創刊号〉

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが紙面の都合上その一部を紹介します。

編集者名	図書名	発行所名
財団法人	日本海軍史 第一巻	財団法人
海軍歴史保存会	通史 第一・二編	海軍歴史保存会
〃	第二巻	〃
	―通史第三編―	
〃	第三巻	〃
	―通史第四編―	
〃	第四巻	〃
	―通史第五・六編―	
〃	第五巻	〃
	―部門小史上―	
〃	第六巻	〃
	―部門小史下―	
〃	第七巻 機構 人事	〃
	予算決算	
	艦船 航空機	
	兵器	
〃	第八巻	〃
	―年表 主要文書―	
〃	第九巻	〃
	―将官履歴 上―	
〃	第十巻	
	―将官履歴 下―	
〃	第十一巻 主要海戦	
	観閲式 旗章等	
	図書資料目録	
	人名索引	
「戦後50年の歩み」編集委員会	戦後50年の歩み	沖縄県
名嘉正八郎	図説 沖縄の城	那覇出版社

業務日誌

◆一九九六年（平成八年）

九月一九日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、白浜へ日帰り出張。（職員一人）

・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付。（祖納）

九月二〇日

・戦争体験記編集のため、在沖小浜郷友会名簿を根本宏祐氏から借用。

九月二六日

・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付。（古見、干立）

一〇月二日

・「竹富町史だより10号」印刷製本見積書、八島印刷から徴収。

・町史編集室定例会議、十月の業務予定検討。

・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付。（大原、白浜）

一〇月三日

・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付。（小浜）

一〇月四日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原、白浜へ日帰り出張。（職員二人）

一〇月七日

・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付。（新城、網取）

一〇月九日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、竹富へ日帰り出張。（職員二人）

一〇月一一日

・在沖小浜郷友会へ戦災実態調査票送付。

一〇月一四日

・「戦争体験記録」島の概況等、生原稿送付。（新城）

一〇月一五日

・石垣在小浜郷友会員三世帯、戦災実態調査を実施。

一〇月一七日

・戦時中の竹富島の集落地図作成のため、嘉手苅重昭氏から聞き取り調査。

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、古見へ日帰り出張。（職員一人）

一〇月一八日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、小浜島へ一泊出張。（職員一人）

一〇二三日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原へ日帰り出張。（職員二人）

・石垣在小浜郷友会員から戦災実態調査を実施。

・戦時中の竹富島の集落地図作成のため、阿佐伊孫良氏から聞き取り調査を実施。

一〇二四日
・「戦争体験記録」戦争体験記、初校送付（黒島）
一〇月三〇日
・「戦争体験記録」第二章竹富町の戦況と復興①戦争への道他、十三原稿の初校送付。
一〇月三一日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、白浜へ日帰り出張。（職員一人）
一一月一日
・町史編集室定例会議、十一月の業務計画検討。
一一月六日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、那覇市へ二泊三日出張。（八日まで、職員二人）
・「戦争体験記録」戦争関係略年表、初校送付。
一一月七日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、小浜へ日帰り出張。（職員一人）
一一月一二日
・竹富町史だより10号、印刷製本出来上がる。
一一月一四日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、古見へ日帰り出張。（職員一人）
一一月一九日
・「新聞集成Ⅲ」印刷製本のため、指名競争入札実施。八業者参加。光文堂印刷㈱が落札。
一一月二一日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原、干立へ日帰り出張。（職員二人）
・竹富町史だより、10号、町内各世帯へ配付依頼のため、各区長へ送付。
一一月二二日
・戦時中の古見の集落地図作成のため、大底朝要氏から聞き取り調査。
一一月二七日
・戦時中の小浜島細崎集落の家屋配置について聞き取り調査。
「新聞集成Ⅲ」昭和九年から十二年までの宮城順公氏から生原稿、光文堂㈱へ送付。
一一月二九日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原へ日帰り出張。（職員二人）
一二月二日
・町史編集室定例会議、十二月の業務計画検討。
一二月五日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、那覇市へ一泊二日の出張。（職員一人）
一二月一二日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原、白浜へ日帰り出張。（職員一人）

一二月一三日
・「戦争体験記録」戦争体験記、二校送付。（古見、上原、祖納、干立）
一二月一六日
・「新聞集成Ⅲ」昭和十三年から二十年までの記事生原稿、光文堂㈱へ送付。
一二月一九日
・町史編集室臨時会議、年末年始の業務について確認。
一二月二四日
・「戦争体験記録」戦争体験記、二校送付。（網取、崎山、鳩間、波照間）

◆一九九七年（平成九年）
一月六日
・平成九年仕事始めの式。
・町史編集室定例会議、一月の業務計画検討。
一月九日
・「新聞集成Ⅲ」印刷製本の進捗状況チェック及び前近代・近代資料の収集のため、沖縄本島へ一泊二日出張。（職員二人）
一月一六日
・「新聞集成Ⅲ」昭和九年、十年の原稿初校届く。
一月二〇日
・「新聞集成Ⅲ」昭和十一年から十三年までの原稿初校届く。
一月二四日
・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原へ日帰り出張。（職員一人）
一月三一日
・「戦争体験記録」口絵、発刊のことば、発刊によせて、凡例等、初校送付。
・「戦争体験記録」集落の概況、集落地図等、初校送付。（網取、鳩間）
・「戦争体験記録」第二章竹富町の概況と復興の「戦争への道」など、十四原稿初校送付。
・「戦争体験記録」戦争体験記、二校送付。（竹富、小浜）
・「戦争体験記録」疎開地地図、船浮要塞配置図、証言者名簿の生原稿送付。
・「戦争体験記録」戦争関係略年表二校送付。
・「戦争体験記録」鉄田日記、県民指導措置八重山郡細部計画初校送付。
二月一日
・第十二回町史編集委員会及び黒島の史跡巡見。任期満了に伴い十六人の委員に委嘱状交付。
・三木　健編集委員から『時代を彩った女たち―近代沖縄女性史―』など文献資料の寄贈を受ける。
二月四日
・「新聞集成Ⅲ」昭和十六年、十七年の原稿初校届く。
二月五日
・町史編集室定例会議、二月の業務計画検討。

・「新聞集成Ⅲ」不採用記事の目録及び凡例の作成。

二月一〇日

・「新聞集成Ⅲ」昭和十八年から二十年までの原稿初校届く。

二月一三日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、白浜へ一泊二日出張。（職員一人）

二月二〇日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、竹富へ日帰り出張。（職員二人）

二月二六日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原へ日帰り出張。（職員二人）

二月二七日

・県立博物館の波照間島総合調査の中間報告会出席のため、那覇市へ一泊二日出張。（職員一人）

三月二日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、白浜へ日帰り出張。（職員二人）

三月三日

・町史だより11号掲載の《歴史の証言》編集に向けて、前本良吉氏から小浜小学校移転問題及び井戸掘りについての聞き取り調査、戦災実態調査のため、小浜へ日帰り出張。（職員一人）

三月五日

・町史編集室定例会議。三月の業務計画検討。

三月六日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、上原へ日帰り出張。（職員一人）

・沖縄県対米請求権協会、八重山広域市町村圏事務組合主催の平成八年度市町村職員交流研修会に参加。崎山正美氏（風水舎代表）が「環境と島おこし、むら・まちづくり」をテーマに講演。（職員一人出席）

三月一一日

・「戦争体験記録」竹富町全体解説及び西表島全図、解説の生原稿送付。

・「戦争体験記録」第二章竹富町の戦況と復興の「町村行政と官公庁の動向」「学校教育」の生原稿送付。

・「戦争体験記録」戦争体験記二校送付。（上原、古見、黒島、船浮、大原、新城）

・「戦争体験記録」島の概況、世帯別戦災実態一覧表等、初校送付。（新城、祖納、大原、船浮、黒島）

編集後記

◆『竹富町史だより』十一号を発刊することができました。本書は、町史編集の業務を幅広く町民に理解していただき、町民と町史編集室とをつなぐ、交流の場であるとともに、情報紙的な役割を担っています。先号で十号の節目を迎え、今号から、心機一転、新たな一歩を踏み出すことになりました。

◆今号には《歴史の証言》として小浜小学校の敷地移転にかかわり、そして井戸掘りに従事した前本良吉さんの話を掲載しました。前本さんは、九〇歳という高齢にもかかわらず元気です。証言を聞き取ることで、小浜島の近代史のひとコマが浮かび上がりました。《新聞掲載論稿》は、学術的に貴重と思われる、論文を取り上げました。今後とも町民各位のご協力を仰ぎ、真心のこもった町史編集に取り組みます。

竹富町史だより　第11号

平成9年3月31日　発行

編集発行　竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎09808－2－9985

印刷　八島印刷